



# 善正寺だより

〒:512-0902  
 三重県四日市市  
 小杉町1014  
 浄土真宗  
 本願寺派  
 善正寺  
 ☎:059-331-1670  
 fax:059-332-0733

## 掲示板法話

### 念仏により 老病死の苦をのりこえ

#### 真実の「生まれ甲斐」が達成される

今年もいよいよ、師走。だが、一年に終わりが来るように我が命にも終わりが来る。届き始めた訃報葉書を拝見しつつ、「他人事(ひとごと)ではないぞ」と身に染む思いがします。

「今までは人が死ぬかと思いきやわしが死ぬとはこいつあたまらん」という狂歌、これは太田蜀山人という江戸時代の武士の戯れ唄ですが、凶星ですね。「音もなく老いが刻々わが身かな」という法句を詠んだ人がいますが、他人事ではありません。老いと共に病の苦しみが、死の恐怖におののき、絶望する…。それでは人間に生まれ甲斐がないではないか？そこに仏法への問いが生まれるのです。

お釈迦さまは、カピラ城の皇太子に生まれましたが、世の老病死の苦しみの姿を見て出家されたと言われます。生まれて七日後に生母が亡くなられるという悲しさ、寂しさが釈尊出家の根本的な背景、要因だろうと想像されま



の動機でした。

我々も身近な肉親や、親しかった知人、お世話になった方々との別れを通して「我が後生の「大事」をわが身に引き寄せて、人界受生の意味、「本当の生まれ甲斐」を聞いていく機会としなければなりません。

「後生」というと死んでから後の事、それより「今」が大事なんだ、とうそぶく人があります。だが、「後生とは、『あなた、今のままで死ぬますか?』ということですよ」と聞かされ、胸にキーンとききました。

北海道の鈴木章子さん(斜里町・西念寺坊守)は病苦、死苦の中で尊い言葉を残しています。この方は、43歳で乳がんになり肺に転移して、やがて脳まで侵されて、47歳で4人の子と住職の夫を残して亡くなられましたがその間、熱心に聞法され、確かな往生を遂げられた軌跡が綴られています。

「仏さまのお言葉が分かる今の生いただきまして、ありがとうございませした。仏法をお聴かせいただく身にならせていただきまして、ありがとうござ

いました。お念仏をいただくことができて、きまして、ありがとうございました。喜んでこの生、終わらせていただきませす(『癌告知のあとで』(探究社))。本願念仏を聞信することによって、病苦をのりこえ、人間としての「生まれ甲斐」を達成された言葉です。

## ★ 写真アラカルト ★



報恩講の光景

善正寺 ホームページ 住職と坊守の つれづれ日記

☆行事ご案内☆

- お内仏報恩講 12月2日(土)午前10時半**  
庫裏仏間にて、お持ち帰り弁当用意。複数申込可  
秋勤進の時に お内仏報恩講の出欠と弁当個数を伺います  
電話の受付可、最終締切 11月末どなたでも参加大歓迎
- 秋勤進 11月23日(祝)午前8時より**  
行事、世話方、住職が手分けして巡回します  
秋勤進とは初穂米の代りの懇志です。皆様のご協力を  
よろしく願います。留守の方は事前にご連絡下さい
- 除夜の鐘 12月31日夜11時45分より**  
誰でも撞けます。ご家族揃ってお越し下さい
- 元旦会 1月1日午前9時** 新年のスタートは寺で正信偈  
毎夕5時の鐘撞き 年中無休 子供に開放 ご褒美有  
善正寺ホームページ右のQRコードで検索、一年分の寺報  
閲覧可、毎日更新のブログ『住職と坊守のつれづれ日記』  
大好評! ブログで繋がるお念仏の友、開設15年4ヶ月  
42万2千訪問、お悩み相談受付可、即返信します  
一線会テレホン法話 ☎059・354・1454 週替りて担当  
新納骨堂後継者の無い方お墓でお困りの方相談下さい  
法事場所でお困りの方、寺にご相談下さい。本堂使用可

坊守スケッチ



見えないものが見えてくる！



今年の全国盲学校弁論大会で大阪の酒井響希君(17)が、『無意識の壁』という題で発表し優勝しました。

彼は2歳で小児がんにより両目を摘出。盲学校に通いながら、東京パラリンピックの閉会式ではドラマーとして参加し、異なる障害の人と共演して、大勢の人に感動を与えました。

「障害者と健常者の垣根が無くなることを願う自分が、一方では他の障害のある人に自ら壁を作っていることに気付かされた。体の一部が不自由なことは苦労することも多いが、努力や工夫を重ねれば、できることも増やせる。むしろ障害を一つの個性だと捉えて、色々なことに挑戦していけば、他の人には負けない最高の特技を見つけれられる。東京パラリンピックの舞台で、障害者だからこそ表現できることを取り入れ、夫々の個性を生かした最高のパフォーマンスを全力で披露出来た。あの日、あの瞬間は、雲一つない晴れ渡った青空のようだと心底感じた。障害者と健常者の壁、違う障害を持つ人との壁、健常者同士の壁等、あらゆる壁は初めからあったのではなく、自分自身が作り出してしまった。作ることが出来たならば、壊すことが出来る筈。誰もが壁なんて無いという意識を持つだけで、世界が変わる」と

力強く宣言しました。壁を完全に無くし、障害を持つ人に代わることはできませんが、その気持ちに寄り添うことはできます。作家の内館牧子氏は

「見えるものは誰にでも分かるけれども、見えないものをふっと感じて小説にするのが私の仕事。目に障害を持つ方が、健常者が見過すような言葉に敏感に反応して心が震えることがあります。見えないという理由で夢を諦めず、あなたしかできない見えるものに気付いて下さい」と言いました。確かに私も齢を重ねて、様々な苦労を経験する中で、見えないものの尊い存在が有難いと思えるようになりました。それは日々精一杯生きる中で得られる『人生の宝物』だと思えます。

カンパありがとう

加藤きよ枝様、専念寺一同様、梶原先生夫妻、S寺様三名 他 感謝！

お知らせ

※12月2日(土)午前10時半「お内仏報恩講」持ち帰り弁当用意。複数の申込OK。秋勧進の時に欠欠と弁当の数伺います。電話受付も可。最終締切十一月末。どなたの参加も大歓迎！

※梶原佑倅先生著『禅から念仏へ』を「ご希望の方は」ご連絡を！郵送します。

若坊守の子育て日記No.107

十月下旬、地区大運動会が四年ぶりに開催されました。私は子ども育成会の会長として実行委員会の準備係を務めました。四年ぶりなので地区大運動会を知らない人が多く、私も六年生の長男が一年生時に少し参加しただけで、全てが手探りの状態でした。

いざ始まると、地区連合の会長さんがカポチャの着ぐるみで登場。お相撲さんや恐竜の人もいました。障害物競走やパン食い競争では、ごぼう抜きの大ハッスルで、老若男女が入り混じりとても自由な運動会でした。我が家の子ども達も出たい競技を自分で決めて楽しんでいました。

実は、今回の運動会で一番苦労したことは「町別リレー」の選手決めでした。男女六人ずつ、半分が小学生、半分が中学生以上で走ります。事前にメンバーを決めましたが、インフルエンザの大流行で中学生二名が直前に欠席の事態。しかしそれを聞いた元育成会の会長さんが知り合いの子に頼んで、穴を開けずに済みました。協力に感謝です。大人たちが頑張る姿は子供達の目にどう映ったでしょうか？大人もコロナ禍を経て、久々に地域の方と触れ合えた喜びを感じています。



俳壇

体育の日八十二歳完泳す 釋妙水

寺の庭ハサミの音色冬支度 老僧の人生語る報恩講

すつきりと頂白き秋の富士 釋榮邦

焼き芋の程よき焦げ目おやつ時 古民家にひとときわ朱き烏瓜

軒の下蜘蛛が糸張る秋の暮 釋住安

花立てから蛙飛び出す墓参り 馬鈴薯の土寄せしたり八十路かな

咳ひとつなき満堂の報恩講 釋普教

ひろびろと冬菜のみどり輝けり 石路のはな花軸伸ばし明るうす

菅島はつわ蒨の黄海の碧 TS

大空に黄金振り撒く大銀杏

あと少し吊るし置くかや柿すだれ

洗い場の水筒よつつ虫の声 釋秀龍

日直のスピーチのメモ秋高し

秋麗そうじ当番表回す

お日様のお蔭味わう熟し柿 釋清風

眼鏡替え大著に挑む夜長かな

念仏の声響くなり報恩講

☆ 編集子より ☆

「善正寺だより」360号をお届けします。◇30年前、蓮如上人五百回遠忌法要を前に発行、開始されたのがこの「善正寺だより」。拙いながらも皆様にお読み頂き、励まされ続けられて参りました。◇老化、視力の低下でどこまで継続、発行できるのか、懸念しますが、できる限り継続して参りたいと思いますので、引き続きご愛読下さいますようお願い致します。◇皆さまどうぞよいお年をお迎えください。合掌。

師走に入り気忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。ロシア  
対ウクライナの戦争は治まらず、新たにパレスチナ対イスラ  
エルの戦争が勃発して世界は混沌としてきました。まさに  
五濁悪世の時代です。昔から「三人寄れば文殊の知恵」  
といわれますが世界に平和をもたらず文殊菩薩は何  
処に居られるのでしょうか？親鸞聖人や蓮如上人の  
時代も日本中が戦乱で荒廃し人々が生き延びるのに精一杯  
でした。明日の命の保証もなく不安と混乱の日々でした。  
だからひたすらに仏様に救いを求める気持が強かつ  
たのだと思います。その昔、高光大船師がご門徒宅の  
報恩講で嫌々参ったその家の長男から「仏法って何や  
と質問を受けました。「仏法は鉄砲の反対。鉄砲は生き  
た者を殺すが、仏法は死んだ者を生かす」と答えられま  
した。「それなら仏法は棺桶の中の死人を生かすのか？」と問  
返されると「お前みたいな死んだ人間を生かすことじゃ」と答  
えられました。「俺は死んでいないじゃないと生きとるぞ」と言  
い返すと「それは動いているだけ、毎日三度のご飯を食べて  
動いているだけ。石炭を放り込む機関車と同じや、お前に  
人間として生きとる、生かされているという悦びがあるか？」と  
師はお説きになりました。それ以来長男は目覚めて真  
剣に仏法を聞きお寺の役員にもなりました。私達も日  
々聴聞を重ね一日く生かされてゆく喜びを味わい感  
謝の日暮らしかできるように、来年こそは本気で聞法  
に励みたいと思っております。合掌

令和五年十二月

善正寺坊守拝